広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

古典的な技法から生まれた新たな陶芸

和田山真央　大阪府／陶芸家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

1月18日、プレゼンテーションにて

エリア・コンサルティングにて

◇　◇　◇

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。大阪府選出の匠、陶芸家・和田山真央さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

人の暮らしに寄り添う器

完成プロダクト「藍流したわみ鉢」

釉薬を流すことで「水の都」を表現

陶器に用いられる釉薬（ゆうやく）は、ガラス成分が表面で固まり、通常は垂れるということがない。しかし和田山さんは、あえて釉薬を流すことで違った表現を試みた。それは彼の出身地、「水の都」大阪のイメージでもある。

「釉薬で固めてしまうのではなく、自分でも完全にはコントロールできないやり方で、どんな可能性が生まれるか見てみたかったんです。ただ、こうした技法そのものは天目茶碗でも使われていて、僕が発明したわけではありません。見た目は斬新な印象になりましたが、それを生み出したのは古典的なやり方です」

土は、初めて磁土（磁器の原料となる土）を使用した。これまで使っていた陶器用の粘土に比べ、成形しにくく発色も淡白で表情が出にくい。だが、うまく焼き上がったときには他にはない独特の色合いを見せる。

プロジェクトのサポートメンバーである生駒氏からは、器のなかで宇宙を感じさせてほしいと激励された。

「残念ながら今回は時間がなくて、正直そこまで到達できたとは思いません。ただ生駒さんの言葉は、これまでと全然違うことをやってみようと考えるきっかけにはなりました」

バイヤーたちにプロダクトを紹介

釉薬の調合や焼き上げの温度を変えながら、数え切れないほど試行錯誤を重ねた。完成した器は、水面に広がる波紋のような模様が美しく、「流し」の技法は和田山さんの想像以上の効果を生んだ。

「知り合いのシェフ数人に使ってもらったところ、器のイメージに合わせて新たなメニューを考案してくれた人が多くいました。うれしかったですね」

自分のつくったものが、小さくても世の中に変化をもたらした。陶芸家冥利（みょうり）につきるのは、そんなときだ。

和田山 真央
大阪府／陶芸家

1985年大阪生まれ。2008年サウスダコタ州立大学卒業。2009年昼馬和代氏に師事し、2010年第16回新美工芸会展「読売テレビ賞」受賞。2012年京都工芸ビエンナーレ入選、2013年第5回菊池ビエンナーレ、第22回日本陶芸展、第6回現代茶陶展、神戸ビエンナーレに入選。2014年第3回萩大賞展入選。

試作品は300点を超えた

陶芸への思いを語る和田山さん

ムチャだけど新しい　それが大阪のやり方

和田山さんが陶芸に出会ったのは、アメリカの大学で英文学部に在籍していたころ。本人は「きっとホームシックだったんです」と笑うが、外から客観的に見つめ直したことで、日本の良さや自分のなかにもある日本人らしさ、日本文化の影響に気付いたという。

もともとアート志向が強く、これまで主に作家性の高い作品で評価を得てきたが、現在は人の日常に寄り添う「製品」を生み出すことに、より興味がある。

「小難しい顔で『鑑賞』してもらうのは、もういいかなって。それよりも使ってうれしい、楽しいと思ってもらえることのほうが、今は大切に思えるんです」

今回のプロジェクトを通じて他分野の匠たちの仕事にふれ、日本のモノづくりレベルの高さをあらためて実感したという。

選ばれた50人余りの匠のなかで、せっかく大阪府代表として参加するのだから、地元の伝統工芸や特産品とコラボレーションができないだろうか。和田山さんは初め、そう考えたという。

和田山さんの作業風景

「でも、全国に知られているようなものは、これといってないんです。何もないところから、誰もやらないムチャな方法で新しいものを生み出す。それが大阪の人なんですね。強いて言えば、それが大阪の伝統かもしれません」

和田山さんが今回の器を製作したやり方も、陶芸の教科書的に言えば「やってはいけない」とされていることばかりだという。その点でこれは、とても大阪らしいプロダクトと言えそうだ。

この経験が、これからの陶芸家人生にどう生きてくるかはまだわからない。ただ、レクサスというブランドに恥じないよう、大切に歩んでいかなければならないと感じている。

「まだまだ力がないことは自覚していますが、ここから今、何かが始まった気がしています」

「使う人のことを考えてこんな工夫をしたんだな、この部分に気を配っているんだな、と感じさせるようでは、日本人にとってはまだ完成形じゃないんです。それさえ意識させないぐらいに、当たり前に手に収まる、自然に肌になじむというところまで徹底して追い込む。専門はみんな違っても、それが日本の匠に共通した美学じゃないかと思います」

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT